

『学級経営』子どもにとって真の学力づくりとは何か

一九七二年(発行元不明)

## 行動能力をつくる

能力開発工学センター所長

矢口 新

### 一 脱学力を考える

学力などということばはもう使ってはいけないのではないか。みんなでいじくり廻して、手あかだらけになって、すりきれてしまっている。どんなにそのことばを解釈してみても、実体は何かといえればテストによって記憶の有無をしらべることによってつけた、点数の多少であるにすぎない。そんなもの人間にとってほとんど価値がないのである。にもかかわらず、それが上級学校に入学する目安にされたり、就職するときの尺度にされたりしているのである。人間が自分で作り出した幽霊に振り廻されているようなものである。そのことだけならまだよいが、それによって一番大切な人間が見失われてしまうことである。子どもにとっては人生で一番大切なことは学力テストによる成績をとることなのである。くだらぬことを暗記して、ことばだけをひねり廻して、マルチヨンのテストにうまく答えることに最大の関心をもたされている。電車の中で小学生が三人、テストの話をしていた。

「昔の貴族はどんなくらしをしていたか」

「はなやかなくらしをしていた」

「よし、あたり。次はどんな家にすんでいたか」

「なんだったつげな、しん、しん、しんでん何とかだったつげ」

「だめ、つぎ、どんなことをしていたか」

「えーと、しかかんげんがく」

「しーかだよ、かんげんがくではないよ」

こんな調子である。困ったことである。学力論議をいかにやっても教師の意識がかわらなければ、教育の実体はかわらない。依然として教科書をおぼえることである。余程の転換、思い切ったことがなければ、子どもをくだらない生活から救えないのではないか。

小中高と十二年間、大学まで入れば十六年間そんなことをやっていては、人生に何がたいせつかを見失うのも当然である。最近の若者などはと言いたくないが、新しく卒業した人々を採用する先輩たちが一様に悲鳴をあげている。曰く、協力して仕事をしなければならぬときも、ちよつと仕事がむつかしくなると真先に脱落する。曰く、言いつけられなければ自分で積極的に仕事をさがそうとしない。そればかりか仕事をにげることばかり考える。それでは自分のためにならないという忠告をしても、そのことがよくわからないらしい。曰く何々。そういう批判で多いのは、新卒者がまったく軽薄なエゴイストが多いということである。つまり人間社会で生活する性格がつくられていないということであろう。学力などというものより、そういう性格の方がたいせつだということがすっかり忘れられているのだと思う。

性格などというものは、こういう性格がたいせつだということを知っただけでは無意味だということである。知っているといることは口が達者だということにしかすぎない。そうできるということではないのである。知った上にそういう努力をしなければならぬ。その努力をつみあげてはじめてやれるようになる。知っていれば、やろうと思えばいつでもできるのではないか、と現代人は考えている。しかし知っていても、なんとかかんとか理屈をつけてやらない方が多いのであ

る。性格というのは、それをやらないでは気持ちが悪く、当然やるべきことをやっているという状態になっていることである。むしろ知っているなどという意識のない状態なのである。

そういうものをどうして子どもが自分のものとしていくかということ、行動を積みあげるといふこと以外にはあるまい。そういうことが現代の学力づくりという考え方からはどうしても出てこないのである。学力などと、過去のあかのしみついた考えでなく、もっとひろく能力と考えたらどうだろう。学力というとき、教科書にとらわれ、知識になり、結局は行動のともなわれないものになる。それでは性格は形成されないのである。性格も能力である。

## 二 知力もまた行動力

知識の教育はいらないのかという疑問がおこるのである。学力といえども知識と考えるのが現代の思想であるから、知識というものに対する信仰は大へんなものである。しかし知識というものも、実は知識的行動をする性格として考えなければ意味はないのである。たとえば自然科学的知識は現代社会で最も必要なものと考えられている。われわれはそれをもっていることが大切だと思っている。電気は流れる、ということを知っていることは大切だと思っている。それで大して実験や観察もしないで電流などということをおぼえさせている。それで電気についての知識をもたせたと思っている。学力テストはそういうことばを知っているかどうかをテストする。学力づくりということも、そういうことをどうしておぼえさせるかという文脈で考えられている。

こういう考え方の知識、それを土台にした教育はやはり間違っているのである。現代は、知識をもつなどといって、人間がもつものとして人間の外に知識というものがあると考えているかの如くである。人

間の外にあるといえればそれはことばとして、あるいは文学によって客観的にあらわされたものを考える。見かけの上ではそれをもつ、つまり記憶することができるように見える。しかしそれは人間にとって本当に意味のあることではない。知識というのは本質的にはことばの問題ではないのである。ことばは実体をとらえる道具にすぎないのである。たとえば前にあげた例で、「昔の貴族ははなやかなくらしをしていた」というのは何ら実体をあらわしてはいない。「はなやか」などということばはいろいろな実体に対してつかわれるのである。また電流などというその「流れる」も同様であって、子どもは水の流れを頭に思い浮かべるかもしれないが、電流とは実際にはそんなものとは似ても似つかぬものである。そういうことばをおぼえこむことによって、子どもの頭はだんだんものが見えなくなる。固い頭になるのである。

今の学力づくりというのは、知らず知らずのうちにそういう結果を招いている。それは現代の教育が知識注入、もっと端的にいえばことばの注入をやっているからである。現代の子どもに口の達者なのが多いということは誰もいうところであるが、その中味はまったく歯の浮くようなことだと感ずるのはそういう点である。中には子どもが口達者なのを学力があるなどと錯覚する先生方も多いが、それは先生自身なことばだけの知識を本物と見まちがっているからである。現代は一般的なことばだけが行動と分離して横行する時代であるが、それはゆがんだ社会なのである。そういう社会をつくった原因は教育も責任を負わなくてはならない。

最近創造性を育てるといふことがいわれているが、ことばの教育では創造的能力とは逆の方向の教育をやっていることになるのである。つまりことばのからまわりをするのである。創造とは環境に対する反応行動の仕方が新しく生み出されることであって、まったく人間の行動の仕方の問題なのである。環境と人間との行動の関係がかわること

である。実体的な関係なのである。それをことばであらわすのは、その行動をことばという道具で人間が自覚しただけのことで、その時にはたとえ前と同じことばが使われてもまったく意味の異なった使い方をするのである。

こう考えると、知識というのも環境に対する見方、反応の仕方として行動的に考えるべきであり、その教育も行動的に組み立てられなければならない。環境を見る態度、行動が科学的であるということがたいていせつであって、科学的に行動する性格を養うということが教育の主眼とならなくてはならない。そういう性格がつくられなければ、知識というものを生み出すような人間にはならないのである。まず知識を与えなければなどという考え方がこれまでの思想には強いが、与えるということをやっている間に、自分で物を見、反応する性格が失われていくのである。

### 三 行動力づくりの場

学力づくりというのは、実は行動づくりであり、性格づくりだということまで述べたのであるが、こういう考え方は、日本の教育が近代教育になってから百年の間にすっかり失われてしまった。学力づくりの他に性格づくりがあるというような、二元的、三元的な思想が現代では圧倒的に強い。それが人間の教育を教育たらしめないのである。教師は結局知識の切り売りをし、生徒はその切り買いをしているのであって、人間として行動できるようなにはならないのである。

性格をつくるには一人ひとりが環境に向かつて行動しなければならぬ。科学的に物を見ろというのなら、そういうことを自分で日常生活の中で苦勞してやらなければだめなのである。学校の授業時間の中で時々そういうことをやっているということでは、知識の切り買いなのである。そうでなくて、毎日の生活のすべての所で、そういうこと

をする覚悟ができてそれを実行するようにしなくてはだめなのである。学校の授業ではそのヒントを与えるくらいがせいぜいである。そのヒントをたいせつにして毎日の生活をそういう目でみる行動をするのである。そういう態度で子どもを生活させなければならぬ。そうなる遊びも遊びでなくなり学習になるのである。そうして科学的に物を見ることが平常のことになるということが、科学的行動のできる人間ということなのである。

これは何も物を科学的に見るということばかりではない。たとえば学校では人と協力するということについても、あるいは授業で、あるいは遊びの中で行動させようとはごく限られたことである。つまりヒントにすぎない。それをヒントにして毎日の生活の中で子どもがそういうことをたえず実行し、反省するという努力をすることによって、はじめて性格がでかあがるのである。そういうことがなければ、本当に人間として意義ある人生は送れないし、すべての人間の協力によって社会を健全なものにすることはできないのである。学校の授業の時間だけ、観念の上だけで考え、わかったなどと思っているのでは本当の人間になれはしない。そういう教育が現代の社会を次第に悪くし、人心が荒廃し、公害がおこり、自然を破壊し、人間社会を破滅に瀕せしめるという結果を生み出したのである。

そういうふうになると、子どもの能力を育てる、性格をつくるということとは、一人ひとりが相当苦勞していくことになる。またグループをつくって人々との間で行動する苦勞もしなくてはならない。現代教育の定型となっている学級全体を一からげにして、いろいろと話合っているなどということでは到底物にならない。四〇人も生徒が一団となって、教科書をおぼえることをやっているなどという形式ではとても人間をつくっていることにならない。適当にやっていたら大した苦勞もしないで時間は過ぎていくのである。個人個人が責任をも

って真剣にものごと立ちむかうということもない。四〇人もいてみんな協力しましょうなどといってもそれはお題目にすぎない。口先で言っておれば過ぎていくというようなものである。個別学習などということがいわれるが、学習の本質は一人ひとりがそれぞれ行動して学習が成立するのである。しかしそういう行動をする場合は、たとえば科学的に実験をするということはひとりではならぬ場もあってはならぬ場もあり、グループで協力して実験しなくてはならぬ場もある。いずれにしても個人が責任をもって行動しなければ学習は成立しないのである。そういう場を設けてやるのが教師の仕事なのである。教師は何かを生徒に与えるのだという考え方は、人間の性格づくりはできないのである。

#### 四 学級内教育からの脱却

このように考えてくると、子どもの行動力づくりは単に学級だけの問題ではない。近代教育は学校で知識の切り売りをする事になってしまつて、しかもそれで教育のすべては終われりとする考え方が強く、家庭でも行動をさせることはやめてしまつて、学級で教科書をおぼえることの延長が家庭の教育だとしている。家庭には行動をする場面がまだたくさんある。そこで生活をしながら性格をつくっていくことができるのに、親はそういう機会をどんどんつみとつて、何もしないで教科書の前にすわらせている。それで力がつくなどというのは困った考え方である。親は子どもと共同生活をして、子どももそれに協力して一人前の役割を果たしていくべきなのである。そういう機能を現代の家庭は放棄している。これがまた子どもの能力をのばさないで、口先だけの人間をつくる結果にしている。

手伝いをさせるなどということも、ただ親が都合がよいから子どもを使うというのではだめなのである。はじめはすこしずつ手伝いの仕

方を教えるということからはじめて、だんだん積極的に、自発的に、自主的に行動するように性格づくりをしなくてはならない。そういうように場を設けるといふような配慮が現代のおとなには欠けているのである。それは学力づくりなどという考え方がじゃまをしているのである。学力づくりとなると、とたんに教科書を勉強することだといふように目が向いてしまつて、広く人間の能力を育てるといふように頭が働かないのである。そうはいふけれどもやっぱり知識をもっていなければ人間は将来困るのではないかといふたような考え方をするのである。そういう考え方が長い間の習慣的考え方としてなかなか脱却できないでいるというのが現実である。

もし学校の先生方がそういう実践をしようとすると、おそらく両親から非難されるであろう。そんなことより学力をつけてくれなどといわれるにちがいない。そうして両親たちは子どもをいわゆる学習塾などに通わせることになるであろう。なまじつかなことでは、本当の意味の能力づくりは成立しないであろう。これは教育の転換が簡単にゆかないということであるが、実はある意味ではそういうことに対する研究と開発が手おくれになつてきていることなのである。たとえば、知育偏重などということはここ四〇年ぐらいもいわれつづけてきたことであつて、それに対する具体的な教育のあり方を実証的に研究するということをやってこなかったからなのである。これは日本の教育の体質ともいえることであるが、教育の研究者、学者が、外国思想の紹介などに憂き身をやつして、具体的な現実をとらえて実証的に研究するということをしてこなかったことによる。教育の実践をするものは、さまざま条件があつて、自由に新たな方式を開発するといふわけにいかない。そこからは具体的な方法は生まれるはずがないのである。そういう状況の中に今多くの教師が悩んでいる。能力づくりとはそういう状況での問題なのである。学力づくりは子どもをスポイルする。